

御国の福音

第5回：王の詩篇¹

目次

はじめに p. 2

I. 詩篇 2 篇 p. 3

II. 詩篇 8 篇 p. 5

III. 詩篇 72 篇 p. 6

IV. 詩篇 89 篇 p. 8

V. 詩篇 110 篇 p. 8

VI. 詩篇 132 篇 p. 11

王の詩篇における御国の計画のまとめ p. 12

はじめに

A. 前回の復習

1. 「神の御国／王国」(the kingdom of God)の計画について学んでいる。御国の計画は、聖書を貫く軸である。

2. ダビデ契約の主な内容(サムエル記第二7章)
 - (1) ダビデの死後、神はダビデの子孫によって王国をお建てになる(7:12)。

 - (2) ダビデの子孫の「家」(王朝)と「王座」は永遠に続く(7:13)。

 - (3) 異邦人もまたこの契約の祝福に与る(7:19)。

 - (4) この契約はダビデ自身や後継者ソロモンに加え、「はるか先」の将来にも関係している(7:19)。

B. 「王の詩篇」について

1. 詩篇では多くのテーマが扱われているが、特に扱われていることが多い2つのテーマがある²。これらのテーマは、御国の計画と深く関係している。
 - (1) 神による被造世界の支配

 - (2) 神の契約の民(すなわちイスラエルの民)

2. 上記のテーマについての詩篇では、神がお立てになった「イスラエルの王」が強調されていることがある。
 - (1) イスラエルの王に関する詩篇は「王の詩篇(the Royal Psalms)」と呼ばれている。

 - (2) 王の詩篇：詩篇2、18、20-21、45、72、89、101、110、132、142篇³

3. 本講義では詩篇 2、72、89、110、132 篇を扱う。
 - (1) これらの詩篇で歌われている内容は、イエス・キリストにおいて究極的に成就する。
 - a) これらの詩篇には、ダビデやソロモンの治世には該当しない内容がある。
 - b) ペテロは詩篇 110、132 篇をメシア預言として引用した（使 2:25-36）。
 - c) パウロは詩篇 2 篇をメシア預言として引用した（使 13:33）。
 - d) ヘブル書の著者は詩篇 2 篇をメシア預言として引用した（ヘブ 1:5 ; 5:5）。
 - (2) 「王の詩篇」ではないが、詩篇 8 篇も扱う。それは、この詩篇のテーマが「王の詩篇」の内容と大きく関係しているためである。
 - (3) 特に重要な 2、72、110 篇に時間を割く。

I. 詩篇 2 篇

A. 詩篇 2 篇のポイント

1. 作者はダビデである（使 4:25）。
2. 諸国民は神に反抗する。
3. 神は反抗を企てる諸国民を裁き、王として「わたしの子」をシオン（エルサレム）にお立てになる。
4. この詩篇の結論は「幸いなことよ すべて主に身を避ける人は」である。

B. 解説

1. 詩篇 1 篇と 2 篇の関係

- (1) 詩篇 1 篇は「**主**のおしえ」を喜ぶことの幸いを教え、2 篇では主に信頼を置き、また従うことの幸いを教えている⁴。
- (2) 神に信頼を置き、喜びをもって御言葉に従うことは、「御国の子どもたち」であるクリスチャンの生活の本質である。

2. 1-6 節

(1) 登場人物

- a) 諸国民（「もろもろの国民」「地の王たち」「君主たち」等々）
- b) 神
- c) 「主に油注がれた者」 = 「わたしの王」 = 「わたしの子」

(2) 諸国民は神に反抗するが、彼らは神に裁かれる。

(3) 神は「油注がれた者」（ヘブル語で *mashiach*）を王としてお立てになる。その王はエルサレムから、諸国民を統治する。

(4) 以上のことはダビデやソロモンにおいて完全には成就しなかった。

(5) この詩篇で歌われている王の統治は、究極的な「油注がれた者」、すなわちメシアであるイエスによって成就する。

3. 7 節「あなたはわたしの子。わたしが今日 あなたを生んだ。」

(1) これは、「キリストは神ではなく被造物である」と教えている聖句ではない。

(2) 古代中東では、神々とその地上での代理人である王が「父と子」の関係にあるという認識が一般的であった⁵。

(3) また、王は王権を得た時に、背後にいる神の「子」となったと見なされた⁶。

(4) この聖句は、神がエルサレムにお立てになるダビデ的王が、神と「父と子」のような特別な関係にあることを教えている。

ルカ 1:32 「その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。」

4. 8 節

- (1) 神は「油注がれた者」であり「子」である王に、「地の果ての果てまで」をお与えになる。
- (2) ダビデもソロモンも、これほどの領域を治めたことはなかった。
- (3) メシアであるイエスは、エルサレムから「地の果ての果てまで」を治められる。

5. 9-12 節

- (1) 王の統治は、神の敵にとっては「鉄の杖」のようである（9 節 a）。
- (2) 神は王の「鉄の杖」を通して、ご自身の敵に「御怒り」を下される（12 節）。
- (3) イエスは再臨される時、ご自身に反抗する諸国民に裁きを下される（マタ 25:31；黙 19 章）。
- (4) 黙示録 2:26-27 では、イエスご自身が詩篇 2 篇を引用し、信者に「鉄の杖」をもって「諸国の民を支配する権威」を受けると預言しておられる。

II. 詩篇 8 篇

A. 詩篇 8 篇のポイント

1. ダビデは、人の本来の使命は被造世界を治めることだと歌っている。
2. この詩篇は、「創世記 1:26-28 の解説」にもなっている⁷。
3. イスラエルの王ダビデは、人間という存在自体が王として創造されたことを認めている。
4. パウロおよびヘブル書の著者は、被造世界の王という役割はイエスにあって成就するという理解を示している（I コリ 15:25-28；ヘブ 2:5-8）。

III. 詩篇 72 篇

A. 詩篇 72 篇のポイント

1. この詩篇は、神がお立てになった義なる王が与える祝福について教えている⁸。
2. 神がお立てになる王は、民に平和と安らぎを与えてくださる。また、王の統治下では豊かな物質的祝福がある。
3. 神がお立てになる王は、地の果てにいたるまで統べ治められる。
4. 神がお立てになる王により、すべての国々が祝福される。
5. 神がお立てになる王は、すべての国々からほめたたえられる。

B. 解説

1. この詩篇が歌っている「王」とは誰か？
 - (1) 詩篇の著者およびテーマについては諸説ある⁹。
 - a) ダビデがソロモンの統治のためにささげた祈りの歌
 - b) ソロモンが自分の統治のためにささげた祈りの歌
 - c) ソロモンが将来の理想的な王のためにささげた祈りの歌
 - d) 無名の作者がソロモンのため／理想的な王のためにささげた祈りの歌
 - (2) ここで歌われている「王」の支配の特徴は、栄華を極めたソロモンの時代にさえも実現しなかった。
 - (3) よって、この詩篇は究極的／理想的な王の統治を求めているか、その王の統治を預言的にほめたたえている祈りの歌である。
 - (4) 聖書が教える究極的／理想的な王は、受肉された神ご自身であり、ダビデの王座を永遠にお立てになるイエス・キリストのことである。
 - (5) よって、この詩篇はメシア詩篇であると言える¹⁰。
2. 1-4 節
 - (1) 神は、王に「さばき」と「義」をお与えになる（1 節）。

(2) 王はそれを正しく用いて、苦しむ民を救われる (2-4 節)。

3. 8-14 節

(1) 王の統治は世界中に至る (8 節)。

(2) すべての王、すべての国々が、この方に仕える (11 節)。

(3) 王は、諸国民の中の「叫び求める貧しい者や助ける人のない苦しむ者」をも助けられる (12-14 節)。

(4) 以上のことから、ダビデ契約に約束されていた王の支配と祝福が、イスラエルだけではなく異邦人にまで及ぶことを再確認できる。

4. 16 節

(1) 王の統治下では物質的な豊かさが与えられる。

(2) ソロモンの統治下でも物質的豊かさがあった (1 列 8 章)。しかし、このメシア的王の統治下での豊かさは、それ以上である。

5. 詩篇 72 篇と神の地上的王国

(1) ここで歌われているメシア的王の統治下には、苦しめられる者、助けを求める者がいる。また、王の裁きが行われている。

(2) 黙示録 21-22 章で語られている永遠の秩序の中では、「もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない」。

(3) すなわち、詩篇 72 篇で歌われているメシアの統治は、永遠の秩序の状態ではない。「ここで語られている時代は、今の時代からは遠く離れている。しかし、永遠の秩序の状態とも異なる。永遠の秩序においては、もはや罪や苦しみはないからである。」(ウェイン・グルーデム) ¹¹

- (4) したがって、この詩篇で歌われているメシアの統治の内容は、永遠の秩序の前に、神の地上的王国が成就することを示唆している。
- (5) 詩篇 72 篇は、黙示録 20:1-6 で預言されている千年王国の特徴を歌ったものでもある。

IV. 詩篇 89 篇

A. 詩篇 89 篇のポイント

1. ダビデ契約が「契約」であることの根拠聖句のひとつ（3-4、28、33-35 節）。
 - (1) II サム 7 章の内容や文法を分析し、当時の中東文化と比較することで、ダビデ契約が契約であることは説明できる¹²。
 - (2) しかし、聖書でダビデ契約をはっきり「契約」と呼んでいるのはこの歌である。
2. 苦難の日々の中で、ダビデ契約の成就を願っている詩篇である。
3. ダビデ契約は神がお与えになった無条件契約であり、永遠の契約であることが歌われている。

V. 詩篇 110 篇

A. 詩篇 110 篇のポイント

1. この詩篇は新約聖書で最も多く引用されている詩篇である。それだけでなく、最も引用されている旧約聖句でもある¹³。
2. 神（**主**）がメシア（私の主）に語っておられる（マコ 12:35-37；使 2:34-35）。
3. ダビデ契約で約束されたメシア的王は祭司でもある。
4. メシアは、時が満ちるまでの間、神の右の座に着いておられる。
5. 神の敵を打ち負かすための時が満ちて「御怒りの日」が来ると、メシアは国々を裁かれる。
6. メシアの統治はシオン（エルサレム）から行われる。

B. 解説

1. 1 節 a
 - (1) ダビデは、**主**（ヤハウェ）と「私の主」（メシア）の交わりを目にしている。

- (2) この詩篇は、ダビデによる預言的詩篇である。
- (3) メシアは神の右の座に着いているように命じられている。神の「右の座」とは、神の権威の座である¹⁴。
- (4) 古代中東の文脈において、王の右の座に着く者は王と同格の存在である¹⁵。したがって、「メシアは神の右に着座するように招かれているのだから、神と同格の存在だということがわかる」¹⁶。
- (5) ペテロは、イエスの昇天の預言として、詩篇 110:1 を引用している（使 2:33-35）。つまり、天に昇られたイエスは、今神の右に着座しておられる。

2. 1 節 b

- (1) メシアが神の右に着座しておられるのは、神がメシアの敵を、メシアの足台とするまでである。
- (2) 古代中東の文書や絵画では、王が神々の力により敵の国々を足台としている様子や、敵の首を足台にしている様子が描かれている¹⁷。
- (3) これは、メシアの敵が彼に服従することになるという預言である¹⁸。

3. 2-3 節

- (1) 詩篇 2:9 では、メシアの支配は「鉄の杖」のようだと言われていた。ここでは、メシアはシオンから「力の杖」でもって諸国民を支配することが歌われている（2 節）。
- (2) 時が満ちると、メシアは天から降って来られ、御力をもって地を治められる。
- (3) メシアが地へ来られる日は「戦いの日」である。そして、メシアに従う者たちはその日に彼に仕える（3 節）。

- a) 黙示録 19:14 では、神に敵対する諸国民と戦うために来られるイエスに、「白くきよい亜麻布」をまとった聖徒たちが従ってくると預言されている¹⁹。
- b) また、聖徒たちはメシアから権威を授けられ、諸国民を治めるようになる(黙 2:26-27)。

4. 4 節

- (1) メシア的王は祭司でもあるということがはっきりと宣言されている。
- (2) モーセ契約の時代のイスラエルにおいて、正統な祭司はレビ族であり、正統な王はユダ族である。よって、王が祭司的行動を取ることは基本的にはあり得ず、そのような例は極めて稀である。
- (3) メシア的王はレビ的祭司ではなく、「メルキゼデクの例に倣」った永遠の祭司である。
- (4) メルキゼデクは、アブラハムの時代のサレム（ダビデの時代のエルサレム）の王である。彼は「いと高き神の祭司」でもあり、アブラハムを祝福した(創 14:18)。
- (5) メシアとメルキゼデクの関連性
 - a) とともにサレム／エルサレムの王である。
 - b) メルキゼデクはアブラハムを祝福した。メシアはアブラハムの肉体的子孫（イスラエル人信者）と霊的子孫（異邦人信者）に祝福をもたらされる。
- (6) レビ族ではなくユダ族から出るメシアが祭司となるということは、モーセ契約の時代が過ぎ去ることを意味している（ヘブ 7:11-12）。
- (7) 以上のことは、モーセ契約の時代の後、メシアによって新しい契約の時代がもたらされるということを示唆している（ヘブ 8:13；9:15 参照）。

5. 5-7 節

- (1) ここからダビデ自身の歌である。「あなた」は神、「あなたの右におられる主」はメシアを指している。

(2) 再び、メシアの敵の敗北が強調されている。メシアが天から降って来られ、反抗する諸国の王たちと戦われる日は「御怒りの日」である（5節）。

(3) メシアの敵は裁かれ、殺される（6節；黙 19 章などを参照）。

(4) 7節の「主は……流れから水を飲まれる」は、王の戴冠式における清めの儀式のイメージだと考える学者もいる²⁰。「その頭を高く上げられる」と合わせると、敵に対する王の勝利と栄光が象徴的に描かれているのだと思われる²¹。

6. おわりに

(1) メシアはしばらく神の右に着座しておられ、後に地上へ戻ってこられる。このことは、メシアが2度地上に来られる（初臨と再臨）必要性について、ヒントを与えてくれている。

(2) メシアは神ご自身であり、私たちと神を仲介する永遠の大祭司であり、ダビデの子孫から出る比類なき王である。私たち信者は、そのような方に救われ、そのような方を信じ、そのような方に仕える祝福をいただいている。

VI. 詩篇 132 篇

A. 詩篇 132 篇のポイント

1. 詩篇 89 篇のように、ダビデ契約の成就を願う歌である。
2. ダビデ契約の内容は「主が取り消すことのない真実」である（11節）。
3. ヤハウエはメシア的王のためにシオンを選ばれた（13-17節）。
4. 神はメシアの敵に「恥をまとわせる」が、メシアの上には「王冠が光り輝く」（18節）。

王の詩篇における御国の計画のまとめ

1. 詩篇における御国の神学は、サムエル記第二7章のダビデ契約に基づいている。
2. 神は、ダビデとダビデの子孫に対する契約を成し遂げられる。
3. 神は、ダビデの子孫のひとりを用いて契約を成し遂げられる。
4. ダビデ契約の成就是、イスラエルに回復、平和、敵からの守りが与えられることを含んでいる。
5. 異邦人諸国は、愚かにも神の御国の計画に抵抗する。
6. 神は、御国をもたらす時、傲慢な諸国を裁かれる。
7. 王であり、祭司であり、子である方が、神の右の座に引き揚げられる。
8. 王であり祭司である方は、しばらくの間神の右の座に着いておられる。その後、彼はエルサレムにおいて王座に就かれ、世界中を統べ治める。

¹ 本講義は以下のテキストに基づく。Michael J. Vlach, *He Will Reign Forever: A Biblical Theology of the Kingdom of God* (Silverton, OR: Lampion Press, 2017), 127–43.

² Eugene H. Merrill, Mark F. Rooker, and Michael A. Grisanti, *The World and the Word: An Introduction to the Old Testament* (Nashville, TN: B&H, 2011), 516.

³ Ibid.; Allen P. Ross, “Psalms,” in *Bible Knowledge Commentary*, eds. John F. Walvoord and Roy B. Zuck (Wheaton, IL: Victor Books, 1985), 1:791.

⁴ 参照：富井悠夫「詩篇」『新実用聖書注解』宇田進・富井悠夫・宮村武夫共編（いのちのことば社、2008年）726頁。

⁵ John H. Walton and Craig S. Keener, eds., *NIV Cultural Backgrounds Study Bible* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 2016), 880–81.

⁶ Ibid.; Multiple Faculty Contributors, “Psalms,” in *The Moody Bible Commentary*, eds. Michael Rydelnik and Michael Vanlaningham (Chicago: Moody, 2014), 761.

⁷ Peter J. Gentry and Stephen J. Wellum, *Kingdom through Covenant: A Biblical-Theological Understanding of the Covenants* (Wheaton, IL: Crossway, 2012), 196.

⁸ Ross, 1:846.

⁹ Cf. Derek Kidner, *Psalms 1–72: An Introduction and Commentary*, Tyndale Old Testament Commentary (Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1973), 273. なお、20節からはこの詩篇が「ダビデの祈り」であるように読める。しかし、多くの注解者たちは、本節はこの詩篇そのものというよりも、詩篇第2巻の締め括りの言葉であると捉えている。Cf. Kidner, 277; Ross, 1:847.

¹⁰ Walter C. Kaiser, Jr., *The Messiah in the Old Testament* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1995), 133. 富井は次のように指摘している。「これはダビデ、ソロモン両方の祈りである。またそのような理想的な王を求めるという点でメシヤ詩篇であり、クリスチャンの祈りでもある。」(785 頁。)

¹¹ Wayne Grudem, *Systematic Theology: An Introduction to Biblical Doctrine* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1997), 1129.

¹² M. Weinfeld, "The Covenant of Grant in the Old Testament and in the Ancient Near East," *Journal of the American Oriental Society* 90/2 (Apr.-Jun. 1970): 184–203.

¹³ David M. Hay, *Glory at the Right Hand* (Nashville, TN: Abingdon Press, 1973), 163–65.

¹⁴ Ross, 1:873; Vlach, 136–37.

¹⁵ *NIV Cultural Backgrounds Study Bible*, 991.

¹⁶ アーノルド・フルクテンバウム『メシア的キリスト論—旧約聖書のメシア預言で読み解くイエスの生涯—』佐野剛史訳（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ出版部、2016 年）128 頁。

¹⁷ *NIV Cultural Backgrounds Study Bible*, 991.

¹⁸ Ibid.

¹⁹ 参照：ユダ¹⁴。Cf. Robert L. Thomas, *Revelation 8–22: An Exegetical Commentary* (Chicago: Moody, 1995), 387–88; 岡山英雄『ヨハネの黙示録注解—恵みがすべてに』（いのちのことば社、2014 年）360 頁。Grant R. Osborne は、黙 19:14 の天の軍勢は「天使と聖徒たちの両方」という見解が適切だと述べている（*Revelation*, Baker Exegetical Commentary on the New Testament [Grand Rapids, MI: Baker, 2002], 684）。

²⁰ *NIV Cultural Backgrounds Study Bible*, 992.

²¹ Ross, 1:874.